

# 實體と屬性について

——スピノーザ解釋の問題——

川村三千雄

## 序論——スピノーザ哲學の問題

哲學思想の歴史に於て、スピノーザ主義とエレア派との思想的親疎をとり出すことは必ずしも意味のないことではあるまい。確にスピノーザとパルメデスとは同一の原理より出發するものゝ如く解される。即ちパルメデスに於ける「有るもの」(to eon)とスピノーザに於ける「實體」(substantia)とは共に一なる絶對的無制約的存在であり、しかも其等は共に直接的無媒介的に定立される。こゝに兩者の原理的同一性を認めることが出来るのであるが、その體系的展開に於ては兩者は決定的な相違を有すると考へられる。

パルメデスにあつては「有るもの」は眞にして且つ唯一なる認識の對象であり、諸命題は純粹に論理的、理性的にこの「有るもの」なる概念から導出される。随つて、カント的に言へばパルメデスの命題は純粹にアプリオリな分析的命題であり、その結果感覺的世界の認識に關して十分な原理を與へるものではない。むしろ「有るもの」に對してそれ以外のものは所謂「有らぬもの」(to me eon)であり、其は端的に非存在である。随つて感官的所與の世界は悉く空虚な假象に過ぎずそれと共に多、運動は矛盾として否定されるといふ結果にならざるを得ない。

— 1 —  
實體と屬性について

## 實體と屬性について

かゝるパルメニデス的一者に對して、スピノーザの實體は決して靜的に自己同一性に留まる絶對者ではない。むしろ單に自己同一的な分析的命題の原理ではなく、その中に自己同一性を破る綜合的原理を含む無限の力として捉へられる。力は自らはたらくものとして動的に世界の中に顯現されるのであり、同時にそれは論理的には他を生み出し且つ包んでゆく綜合的概念であると考へられる。スピノーザの實體はかゝる絶對的無限的な力として措定されることによつて、多と運動の世界は實體の中に *potentiell* に含まれることになる。随つて感性的世界は實體の中にその根據を有することになり、其故にそれは決して非存在的な假象の世界ではない。 *natura naturans* は力であり、かゝる力は自らの中に *natura naturata* を含むものでなければならぬ。

ところでスピノーザの實體概念の根底的な原理をなすものは所謂自己因 *causa sui* の思想である。此の自己因の思想はスコラ哲學或は更に遠くプラトンの思想に迄その系譜を求めることが可能であらう。<sup>註</sup>然し自己因としての實體概念が哲學體系の中に重要な位置を占めるに至つたのはデカルトによるものに他ならない。デカルトは實體を次の如く規定する。「我々が實體を解する場合には、それが存在するためには自己自身以外のものを必要としないといふ如く存在する事物のみを解する」(Descartes: *Les Principes de la philosophie* I. 51) 此の規定は明にスピノーザの實體の定義「實體とは自己の中にあり且つ自己に由つて理解されるもの、即ちその概念は他のものゝ概念を要することなくして形成されるものであると解する」(Eh. I Def. III) と同一である。随つてスピノーザは形式的にデカルトの實體概念をその儘自己の體系の中に採り入れてゐると考へられるのである。

註 自己因の思想はスコラ哲學、教父哲學の中に既に見出される。特にスペインのスコラ哲學者スアレス (Francisco Suárez: 1548~1617) *Sens a se* の中に明に見出されると云ふ。(F. Ueberweg: *Grundriss der Gesch. d. phil.* 7 aufl. S. 96, E. Becher: *Der Begriff des attributes bei Spinoza* S. 16)

緒て、上述の實體概念の定義を嚴密な意味に解さんとするならば、それによつては神の無限なる實體のみが意味されなければならぬことは明である。蓋し神以外の如何なる存在もその完全なる意味に於ては自己因と考へることは出来ないからである。然るにデカルトは實體概念をば神にのみ歸するのではなく同時に神によつて創造されたもの、即ち精神 *âme* 及び物體 *corps* にも適用するのである。彼は次の如く言ふ。「何となれば、實體であるものを意味するには、唯それ等が他の被造物の助けなくして存在し得るといふことを認めれば十分である」(Descartes: *ibid.* I. 52) かくてデカルトにとつては神は創造的人格性を有する無限の實體であるが、それに對して被造的有限なる存在も亦實體の本性を有し得るのである。何となれば、精神的存在及び物體的存在は共に實在し且つ相互に他を要せずして明晰判明に認識され得ると考へられるからである。此處に於てデカルトの實體は神なる無限實體と精神及び物體の有限實體とより成ることが知られる。しかも「夫々の實體は主要なる一つの屬性を有する、即ち精神の屬性は思惟であり、同様に延長は物體の屬性である」(Descartes: *ibid.* I. 53) といふのであるが、これよりしてスピノーザの屬性概念も亦デカルトの中にその起源を持つことを知るのである。

然し、精神も物體もデカルトによれば創造された實體 *substance créée* であり、隨つて自己の存在のためには創造者としての神を必要とするものである。それ故彼自身の實體の定義「存在するためには自己以外のものを必要としない」といふ規定を完全に充足するものではない。ところが上に示した如く第一の定義は、それとは齊合的に結合し得ない第二の規定「他の被造物の助けなくして存在し得るといふことを認めれば十分である」といふ表現によつて無雜作に置き換へられるのである。それによつて第一の定義に適合し得ない有限的被造物は第二の規定によつて實體たることが主張されるといふことになる。我々はこゝに明にデカルトの實體概念の混亂と矛盾とを認めざるを得ない。このことはデカルトの哲學が根本的に思惟 *cogitatio* の立場から出發するといふことの必然的な結果とも考へ得るであらう

## 實體と屬性に就いて

か。更にデカルトは思惟する實體と延長を有する實體とを二元的對立の中に置くことにより兩者の關聯、特に精神と身體との關係を全く理解し得ざるものとなすことは屢々指摘されたところである。この問題をデカルト的二元論の觀點より解決を試みるのがゲーリンクス、マルブランシュであることは周知のところであらう。

以上の如きデカルト哲學に内在する難點に對してスピノーザはデカルトの概念を踏襲しつつ、しかも其等に獨自の地位と意味を付與することによつてこれ等の困難を解決せんとする。先づ第一に彼は唯一無限的なもののみを實體として認め、デカルトの有限的實體を唯一實體の屬性、即ち唯一實體の單なる存在様式と見做すのである。即ち「神とは絶対に無限なる實在、即ち夫々永遠無限の本質を表現する無限に多くの屬性より成れる實體であると解する」(Eth. I. Def. VI) と語るのであり、しかも實體は唯一であることが證明されることによつて (Eth. Prop. V Dem.) 實體が確立される。それと共にデカルトの延長の實體と思惟的實體とは夫々實體的延長、實體的思惟となされることによつて延長も思惟も共に唯一實體の中に含まれることになりデカルト哲學の二元論の困難は一應解決されるが如く見える。然しそのことによつて却つてスピノーザはデカルト哲學とは異なつた種類の困難に逢着せざるを得ない。即ち無媒介的直接的に定立された無限的絕對的實體は如何にして規定され得るのであるか、屬性若しくは様態との關係は如何に考へられるか、しかも無限に多くの屬性の主張に對して思惟と延長との二屬性の提示は如何にして理解されるのであるか。他方、上の問題は又無媒介的な非人格的基體たる無限實體は如何にして存在の多様性を産み出し得るのであるかといふ神と世界との關係の問題とも關聯すると思はれるのである。<sup>註</sup>

註 スピノーザに於ける上述の困難なる諸問題を直接とり上げることが本稿の意圖するところではない。随つて二、三の解釋を示して問題の所在を示して置くに止めよう。

クーノー・フィツシャーは神より世界の發生の説明には次の三つの立場が考へられるといふ。それは第一、創造 Schöpfung—神の

意志、第二、流出 Emanation—神の本質、第三、發展 Entwicklung—進化 Evolution の三者である。然しながら第一にスピノーザ主義に於ては神は悟性も意志もないが故に世界は神の意志による創造と考へることは出来ない。第二にスピノーザに於ては神の本質は流出するものではなく三角形と内角の和の二直角との關係の如く本質から folgen するものである。第三に神は永遠無限完全なる實體であるから、神が現在ある以上に完全になり得ると考へることは出来ない。随つて、神より世界への移行は如何なる形に於ても考へることは出来ない。兩者を區別せんとするならば兩者の間には移行なき對立、若しくは直接的統一のみが残される。即ち統一なき區別若しくは區別なき統一のいつれかのみが可能であるといひ (Kuno Fischer: Geschichte der neuen Philosophie Ed. II 2 auf. S. 409) かくる觀點よりすればスピノーザ主義に於ける世界の定在若しくは物の存在はある不可解なものとなざるを得ないと主張する。 (Ibid. S. 410)

此の問題は單にスピノーザ解釋のアポリヤたるのみではなく、スピノーザ自身にとつても未解決の問題であつたことが知られる。チルンハウゼンは「貴下の與へられる延長の概念よりして如何にして世界の多様がアプリオリに示されるのであるか」(Ep. LXXI) と問ふのであるが、スピノーザは其に對して「世界の多様が延長の概念のみからアプリオリに導出され得るか否かの貴下の質問に關しては、余はそれが不可能であることを既に十分明白に示したと信ずる」と言ひ更に次の如く附言する「然し余が生きながらへるならば他日その問題を貴下と話し合ひ度いと思ふ」(Ep. LXXII) 此の書翰が一六七六年に書かれたことよりすればその後一年余にしてスピノーザは歿したことになるのであり随つて、彼自身にとつても此の根本問題は未解決に終つたと考へざるを得ない。

更に身体と精神に關するスピノーザの思想的發展をフロイデンタールは極めて明晰に分析し、その結論に次の如く主張する。即ち我々はスピノーザより並行的理論の一般的原理を聞くが、然し思惟と本質上同一であるがしかもそれと比較し得ざる延長の變容と思惟の變容との關係については何物をも示すものではない。むしろ其はデカルト的二元論への逆轉さへも思はせるものであるといふ。(Freudenthal: ueber die Entwicklung Ueber Lehre von psychophysischen Parallelismus bei Spinoza S. 85)

さて、スピノーザの困難は上の註に示される如く存在の問題に關はるのであるが、それは同時に認識の問題に關係する。即ち神と世界との存在論的問題は同時に實體と様態との概念的關係の問題と相即し、延長と多様の世界、若しくは精神と身體との關係は屬性と様態の問題と相即する。確に實體、屬性、様態の三者はスピノーザ哲學體系の基礎

概念であり、随つて以上の存在論的問題も此の三個の概念の相互的關係に歸着すると考へられるであらう。随つて、スピノーザ哲學の批判、解釋は此の三個の概念に集中されて來たのであり、それはスピノーザ研究の歴史が示すところに外ならない。しかもスピノーザの根本問題は就中三者の關係にあると考へられるのであるが、わけても屬性の概念は實體と様態とを結合するものとしてその解釋はスピノーザ解釋に對して特に重要な意義を有する。随つてスピノーザの思想に關して最も多く論じられたのは屬性であるといふことも必然的な理由の存するところであらう。我々も亦若干の先人の研究を手懸りとして實體と屬性の關係、特に屬性の問題を中心とし考察をすゝめ度いと思ふ。

## 第一節 實體の本質——スピノーザ哲學に於ける根本前提

「スピノーザ哲學と其の運命を共にする」とはスピノチスムスの實體について屢々言はれて來たことである。たしかに實體概念を放棄することはスピノーザの體系を破壊することに外ならない。然し我々の解釋が單に超越的ではなく根本的に内在的批判の立場に立たなければならぬとすれば我々は先づ何よりもスピノーザの前提に立つて哲學するのでなければならぬ。それでは何故に實體概念の止揚は體系の否定を意味するのであるか、或はスピノーザの前提とは何であるか。此の兩者は同一の命題によつて答へられるであらう。即ちそれはスピノーザ哲學の根本前提をなすものは實體の直接的定立であるといふことに外ならない。此處に同一形式の實體概念を使用するデカルトとスピノーザとの決定的な相違が存する。何となればデカルトの實體は（それが無限的實體にせよ）決して直接的ではなく既に *cogito* の立場によつて媒介されたものに外ならないのであるが、それに對してスピノーザの實體は無媒介的であると考へられるからである。

さて、實體の本質は既に示された如く自己因として規定されるのであるが、此の規定は特に重要な意味を持つもの

と考へなければならぬ。蓋し *causa* は何よりも實體が原因であることを示し、原因は *Ursache* として根源的存在 *Urwesen* であると同時に、能動的にはたらく力 *Macht* として考へられるからである。しかも此の實體の力は實體の本質 *essentia* であつて、其は實體の存在即ち *existentia* と直接に結合してゐるのである。彼は「神の存在とその本質とは同一である」(Eth. I. Prop. XX)と言ふのであるが本質と存在との結合は動力因 *causa efficiens* と基體との直接的結合を意味し、それは又因果性と實體との直接的等置を示す。かゝる立場は勿論カント的な二範疇の區別と相容れるものではなく随つてそこに獨斷論と稱される所以も存するのであるが、然しそれを以つて直ちにユーベルウエク<sup>註一</sup>の言ふ如くスピノーザの思想的混亂となすことは出来ない。むしろスピノーザの實體は本質的に力として存在するのであつて實體は因果性自身であると考へられる。随つてツラウスキー<sup>註二</sup>の言ふが如くスピノーザは實體性と因果性、存在と本質の二範疇を混同したのではなく二つのものを一に歸したものと見る可きであらう。たしかにスピノーザ哲學の難點は深く上述の實體規定の中に胚胎すると言ひ得るであらうが、それにも拘はらず其はスピノーザ主義の根本思想であり且つ又スピノーザの神に對する根本確信であると考へなければならぬであらう。

註一 ユーベルウエクは次の如く評する。「スピノーザの意圖よりすれば表現は本質によつて存在が制約されてゐることに言及する、然し本質は既に存在せずして存在を惹起することは出来ない、随つてそれによれば(スピノーザの表現―筆者註)惹起される筈のものが既に存在するのである。然し本質が存在するのではなくて、單に(定義の中で)我々の本質の思想(*ideum*)ではなくて *idea*)が與へられるのみである、随つて此の思想はそれ自身の心理的存在を含むが存在の客觀的―實在的存在を生ずるものではない」と言ひ、スピノーザはデカルト又はアンセルムスと同様に本体論的な誤謬を犯すものであると主張する。(Ueberweg; Grundriss, Gesch. d. phil. 7 aufl. S. 96f. Note, Vgl. Kant: Kritik der reinen Vernunft, Von der Unmöglichkeit eines ontologischen Beweiss vom Dasein Gottes 620~630)

註二 (I, Zulawski; Das Problem der Kausalität bei Spinoza S.32)

實體と屬性について

さて定義第三によつては實體の自己充足性が意味され、これにより實體は絶對的な力であることが示されてゐる。更に第六定義に於ては實體と神とが等置され實體の力は無限にして無制約的であるとなされる。こゝで注意されなければならぬことはスピノーザの體系に於ける(特にエチカに限定されるのであるが)定義は決して單に哲學的考察の方法的前提ではなく又は單なる言語使用に於ける規定ではない。むしろブランシュヴィクが言ふ如く原理であり根本觀念 *une idée première* を示すものと考へなければならぬ。(Leon Brunschvicg; Spinoza P.53) 随つて、爾餘の多くの命題は定義體系の論理的展開に外ならず其が即ち幾何學的な論證の形式によつて示されるのである。しかも定義は無媒介的に指定された命題であるが、これ等の無規定的定義と證明される命題とを結合するものは即ち公理に外ならない。随つて類比的に言ふならば定義と命題との關係は恰も本質と存在との關係の如く定義は命題を含み命題は定義よりア priori に導出されるのである。然し公理をその兩者の媒介となすことによつて定義より導出される諸命題は單に定義に關する分析的命題ではないと考へられるのである。

ところでスピノーザに於ける實體の存在はエチカ第一部の命題七、十一の二ヶ所に於て證明されてゐるのであるが命題七は定義三に關して實體の存在を論證するものであり、命題十一は定義六に於て與へられたる神の存在の證明を示してゐる。しかも兩命題共その證明は自己因としての實體の根本概念に基くものである。此の神の存在の證明はアンセルムス及びデカルトの神の本體論的證明と著しい類似を示す。随つて、スピノーザはアンセルムス又はデカルトと同じく本體論者であり、神の概念より神の存在を導出するものと評され、若しくはアンセルムス及びデカルトの本體論的證明に嚴密完全な論理的表現を與へたに過ぎないと言はれる。<sup>註</sup>しかしかく解することは少なくともスピノーザの精神を正しく捉へるものではあるまい。蓋し、スピノーザに於ては定義に示される如く神の存在は神の本質と同一であり、更に神の完全性と實在性とは直接に同一であると考へられる。此の根本前提よりすればスピノーザの立場に



於ては何等神の存在の証明を必要とするものではない。こゝに於てスピノーザのエチカの體系に於ける定義と命題及びその証明との特殊な意味を認めなければならない。即ち前に述べた如く定義は原理であり根本命題であつて、諸命題はその展開であり証明はその展開の説明である。随つて神の存在の証明を俟つて神の存在が定立されるのではなく、逆に神の存在の定立が証明によつて單に説明されてゐると考へる可きであらう。彼にとつて神は存在的証明を要するものではなく、むしろ本質と存在との同一性としての神の存在は彼の根本的確信に基くものと言はざるを得ない。彼にとつては神の外には何物もなく總ては神の中に在るのであり、神の存在を疑ふことは、二點間の最短距離は直線なること、全體は部分の總和であること、人間が實在することを疑ふ如きものである。(Vgl. A. Wenzel: Die Weltanschauung Spinozas S. 161f. S. 168) 随つて又我々はスピノーザの神の存在の証明を直ちにアンセルムス若しくはデカルトの神の存在の本體論的証明と同一視することは出来ない。<sup>註</sup>

註 ッラウスキーはアンセルムス及びデカルトの神の存在の証明に於ては神の完全性は純粹に人間的主觀的意味に捉へられてゐると言ふ。それに對しスピノーザの神は非人格的實在でありそれに於ては完全性、實在性及び力 *Macht* は同一である。しかも能動的にはたらく力であり、自然の到るところに存し全世界は神なくしては考へられない。かくてッラウスキーはスピノーザの思辨的な神は經驗的現實と結び付くものであり、しかも彼の神の存在の証明に於ては彼は經驗的に與へられた事實の上に基くのであるといふ。(Zulawski: Das Problem der Kausalität bei Spinoza S. 38) マーセルウェクについては前註参照。

さて以上の如くして神の存在はスピノーザに於ては體系の根本的前提であるが、更に命題十六の系に於ては神の原因性は第一に凡ゆるものゝ動力因 *causa efficiens* 第二に偶然に由る原因ではなくそれ自身による原因 *causa per se non vero per accidens* 第三には絶對に第一の原因 *causa absolute prima* であると規定される。(Eth. I prop. XVI coroll.) 更に又 *causa per se* の他の表現と見做される自由因 *causa libera* (Eth. I prop. XVII coroll. II) 若しくは唯一因

## 實體と屬性について

*causa unius* (Eth. II Prop. X Schol. II) の如き規定が與へられる。以上の實體の諸規定は根本的には自己因の種々なる側面よりの規定であると考へることができらう。其の上なほ實體は超越因ではなくて内在因 *causa immanens non vero transiens* (Eth. I Prop. XVIII) 且つ又その他の表現と解される本質因 *causa essendi* (Eth. I Prop. XXV Dem.) であるとなされる。かくて實體には種々の原因性の規定が付與されるのであるが、これ等は又凡て自己因なる根本原理から導出されると考へられるであらう。

かくの如く實體は自己因であり、しかもそれが種々なる *causa* として規定されるといふことは、我々が前に示した如く實體は力であるといふことを意味するものに外ならない。スピノーザはエチカ第一部の結論に「神の力は彼の本質自身である」(Eth. I Prop. XXXIV) と語り、その證明に於て次の如く語る。「何となれば神の本質の單なる必然から神は彼自身(命題十一による)及び總てのもの(命題十六及び其の系による)の原因であることが起つてくる。故に神自身及び總てのものがそれに由つて存し且つはたらくところの神の力は彼の本質自身である」(Ibid. Dem.) かくて神は定立された。しかし神の本質として示されたものは本質的には無規定的な自己因 *causa sui* の分析的命題を示すのであり、随つてそれによつては絶對的な力としての一者が直接的に提示されたに止まる。かくる神は如何に自己の本質を顯現するのであるか、神の本質は如何にして認識されるのであるか、我々は更に屬性の考察に進まなければならぬのであるが、其に先立つて實體と屬性との關係をスピノーザの思想發展の上から追及してみよう。

## 第二節 實體と屬性——書翰に於ける思想的發展

前に述べた如くスピノーザの實體及び屬性はデカルトの概念を使用しつゝ、しかも彼の體系に於て全く獨自の意義を有するに至つたのであるが、此の實體、屬性のスピノーザ的概念は決して最初から一義的に確立され且つ一貫的に

維持されたものではない。エチカ以外の彼の著若しくは叙述によれば或は實體と屬性とは全く等置され、或は無限に多くの實體が語られ、或はデカルト的に無限存在と有限存在に區別される。しかもエチカに於て實體と屬性とが明白に區別されるにも拘らず (Eth. I. Def. IV) 其の上なほ實體と屬性とが同一視されるが如き表現をも見出される(例へば Eth. II Prop VII Schol. 2 *substantia cogitans et substantia extensa* の表現の如きはそれである) かゝる錯雜せる思想發展は他面に於て言語使用の不齊合と結合し一層スピノーザ解釋の上に困難を招來してゐると思はれる。たしかに此處に多くの異なつたスピノーザ解釋を導く必然の理由の一つが存するであらう。随つてスピノーザの思想的發展を概観することは彼の思想を理解する上に於て極めて重要なことであると考へられる。本節に於ては實體と屬性に關する思想的發展を彼の書翰の中から考察したいと思ふ。

註 スピノーザの實體、屬性の思想的發展に關しては他の若干の著を考察することも必要であらう。「短論文」*Tractatus brevis, kurze Tractat* と呼ばれる *Tractatus de Deo et homine ejusque felicitate* (一六六一年以前、多分一六五四年若しくは一六五五年に編纂されたと推定される。一六六一年にかゝれた補遺と二つの對話を含む)「知性改良について論文」*Tractatus de intellectus emendatione* (多分一六五五年若しくは一六五六年編纂、とに角一六六二年以前)「デカルト哲學原理」*Remi des Cartes principiorum philosophiae* の附録として「形而上學的思想」*cogitata metaphysica* (一六六二—一六六三年の冬)それ等に對してエチカはその主要内容は一六六二年より一六六五年の間に完成しその後死に至る迄修正されたと思はれる。

以上の如き著の中でエチカ以外に我々の問題に對して重要だと思はれるものは「短論文」である。然し短論文にはなほデカルト的思想が存しスピノーザ自身の思想的發展はそれ以後に見られると思ふ。それに對して書翰集はスピノーザの全体的な思想發展の考察に重要な手懸りを與へるものと思はれる。蓋し書翰は一六六一年より一六七五年に互リスピノーザの思想体系の樹立の全体的時期を含むと考へられるからである。しかしエチカは一六六二年より一六六五年の間に基礎がおかれ更に死(一六七七年)に至る迄修正が試みられたとすればエチカの思想は書翰に現はれた思想的發展と極めて深い内面的關係があると考へられるであらう。

實體と屬性について

- (A) 一余は神をば無限なる諸屬性から成り立つ存在と定義する、それ等の諸屬性の各々はその種類に於て無限であり若しくは最高完全である」(Ep. 2, 1661) ことに屬性は自己自身により且つ自己自身に於て理解されることが附言される。しかも續いて「凡ゆる實體はその種類に於て無限若しくは最高完全でなければならぬ」(ibid.) と言ふ。此の兩命題を矛盾なく解釋せんとするならば、實體は屬性であり、しかも多くの實體と共に多くの屬性が存し神は之等諸實體即ち諸屬性より成るものと考へなければならぬ。此の思想は既に「短論文」の中に見出される思想であり、かゝる觀點よりスピノーザを解釋せんとするのが即ちトーマスの多元説 Plurismus (K. Thomas: Spinoza als Metaphysiker) に外ならない。同じくオルデンブルグに宛てた書翰に於ては「余は實體により自己自身により且つ自己自身に於て解されるものを意味する」と言ひ「余は神はその各々がその種類に於て無限であり若しくは最高完全なる無限に多くの諸屬性から成る存在であると言つた」(Ep. 4) と繰り返へるのであるが、この二命題よりして直ちにエチカの實體と屬性の概念が定立されたと見ることは出来ない。このことは同じ箇所の「諸實體」(傍點筆者) 及び諸偶有以外には實在的に若しくは悟性に對じて永遠的に存在するものはない」(ibid.) といふ表現からも察知されよう。即ちこゝでも實體は神ではなく、しかも實體と屬性とは未だ明確に區別されずむしろ諸實體は諸屬性であると考へざるを得ないからである。随つて又前掲の命題よりエルドマンの如く屬性の實在性を否定し屬性は單に悟性の中にのみ存すると主張することも出来ないであらう。然し逆に神の實在性は屬性の結合によつて生ずるが故に屬性と諸偶有のみが實在的であると解することも困難であらう。(Vgl. E. Becher; Der Begriff des attributs bei Spinoza S. 38)
- (B) 第二の重要は書翰は一六六三年スピノーザとシモン・ド・フリース Simon de Vries との間に於ける二通の書翰である。(Ep. 26, Ep. 27) 最初の書翰はフリースよりスピノーザに宛てたものであるが、此の中でフリースは第八命題の第三の註(前に示した如く此の時は既にエチカの主要部分は完成してゐる。この註は遺稿として出版されたエチカ

の第十命題の註の前半をなしてゐる<sup>註一</sup>を引用し、それによつて「これよりすれば貴下は實體の本性は多くの屬性を有してゐると考へてゐるように思はれる。然し此の説は貴下が絶対的無限實體或は神に關する第六定義に言及するに非ざれば、未だ證明されたものではない。然らずして若しも各々の實體は唯一の屬性のみを有し且つ私が二つの屬性の觀念をもつことが斷定されるならばその場合には二つの異なる屬性が存し、隨つて二つの異なる實體が存することを推論するのが正しいでせう」(Ep. 26)と言ひ此の點に關する説明を求めてゐる。此のフリースの意見はスピノーザのエチカに至る思想の方向を正しく示してゐると思はれる。即ちフリースは絶対的無限實體は神であり、神は多くの屬性を有しなければならないと考へるものと解されるからである。しかもこゝでは更に第六定義については絶対的無限實體が如何にして多くの屬性を有するかといふ實體と屬性に關する根本問題が問はれてゐるのである。

註一 この引用文は次の如くである。「隨つて二つの屬性は實際に異つてゐるものとして、即ち一は他の助けなくして理解されるがその故を以つて我々は兩者が二つの實在若しくは二つの異つた實體を形成することを推論し得ないことは明である。何となれば實體の有する總ての屬性は常に同時に實體の中に存するのであるが、實體の屬性の各々はそれ自身によつて理解されるべきであることは實體の本性に屬するからである」(Ep. 26 Vgl. Eth. I Prop. X Schol.) 註II Eth. I. Def. VI

さてスピノーザの之に對する答はフリースの期待したものではなかつた。スピノーザは「若し余が夫々の實體は唯一つのみの屬性を有するといふのであれば、これは支持されざる命題であり證明を必要とする。余が若し實體によつて唯一つの屬性から成るものを意味するならば、數多くの屬性から成る諸實在を後に實體とは異つた別の名稱で表現する限り此の定義は正しいだらう」(Ep. 27)と答へる。一體此の表現は如何に解す可きであらうか。實體が唯一の屬性より成るとすれば屬性は實體と同一であると考へられる。しかも多くの屬性より成る諸實在が存在しそれ等は實體と呼ばれないとすればこの諸實在は實體の複合體と解される外はない。隨つて一の實體があるのではなく無數の實體

實體と屬性について

が存在することになり所謂原子論的 atomistisch な解釋に導かれるであらう。或は多くの屬性より成る諸實在が實體ではなく夫々個體を形成するとすれば、各個體は多くの實體より成るといふ個體論的 individualistisch な解釋に接近することになるであらう。

續くスピノーザの説明は一轉して絶対無限的實體（神）に無限に多くの屬性を歸することに對する根據を與へるものと考へられ、エチカの命題九と同一の内容を有するのであるが其はむしろ個體論的見地に立つが如く解される。「夫々の存在は我々により若干の屬性の下に於て理解されること、しかも所與の存在が實在若しくは本質を所有するに従つて一層多くの屬性がそれに歸せられるといふことより更に一層明白なことはない。これよりして絶対に無限的な存在が定義されなければならぬ」(ibid.) といふ語られてゐる存在は直ぐその前の箇所「實體（或は存在）」なる表現によつて實體が意味されてゐることは明白である。蓋し前掲の引用文によれば多くの屬性を有する存在と實體とは本來區別される筈だからである。隨つて此處で語られる存在は有限數の屬性より成る夫々の個體であるが神のみが絶対的無限的存在として無限に多くの屬性より成るといふことになる。しかも個體的存在が一般に實體と稱されるならば多くの有限實體と一なる無限實體とが存在することになる。然しエチカ思想によれば個體的存在は決して實體ではなく様態と考へられなければならぬ。隨つて此の書翰に示される上述の思想は全くスピノーザの體系と相容れるものではない。こゝに於て我々は實體、屬性、様態の體系的基礎がなほ確立されてゐないと見るより外はない。

更に同書翰は實體と屬性の區別に關し次の如き重要な敘述を含む。「實體によつて余はそれ自身の中に在り且つそれ自身に由つて理解されるものを意味する、即ち其の概念が他の如何なるものゝ概念をも含まざるものである。屬性によつては上と同一の事物が意味されるのであるが唯、實體に前述に特殊な本性を歸するところの悟性に關して屬性と稱されるだけの相違である」(Ep. 27) 實體の特殊な本性が屬性によつて表現されるとすれば、こゝでも實體は特殊

的多であつて、多的實體の各々には多くの屬性の夫々が對應せしめられることになるであらう。スピノーザの擧げる例によれば、イスラエル民族の第三祖がヤコブ及びイスラエルの名によつて呼ばれる如く、或は凡ゆる光線をその儘反射する面を無色の面と言ふのであるが、その同一の面がそれを見る人によつて白色であると言はれる如きものであるといふ。然し此處で示される例に於ては實體は何を指し屬性に當るものは何であるか。一人のイスラエル族第三祖が實體であつてヤコブ及びイスラエルはその屬性であり、無色の面が實體で有色（例へば白色）の面はその一つの屬性と考へられる可きか。若しくはヤコブが實體でイスラエルが屬性、無色の面が實體で白色の面はその屬性と解さる可きか。前者の場合には實體は多くの屬性を有し、後者の場合には一實體は一屬性によつて規定されることになるであらう。それはともあれ、此處で實體と屬性との區別が語られてゐることは注意されなければならぬ。しかも屬性は實體についての悟性的規定（後者の例は明に主觀的規定）或は屬性は同一實體についての種々の側面からの規定といふことになるであらう。前者の場合は屬性のエルドマン的解釋を導き、後者の場合はトレンデレンブルグの屬性解釋に接近することになると思はれる。然しこゝで十分に注意しなければならぬことは、こゝで語られてゐる實體は決して絶對無限的實體たる神ではなく個體的存在であり、隨つてそれはむしろスピノーザ體系の思想から言へば様態と考へられ、しかも表現の上から言へば屬性と同一のものを意味するが如く解される。それ故様態が未だ規定されざる限り諸實體と諸屬性が存在するといふより外はない。而して實體と屬性とが未だ本質的に區別されてゐないことは次の表現からも推察し得るのである。即ち前掲の實體と屬性との定義に續いて「此の定義——余は繰り返して言ふが——は余が實體若しくは、屬性によつて何を示さんとするかを十分明白に説明してゐる。」（傍點筆者）と語るのである。

(C) 次にマイヤーに宛てた書翰 (Ep. 29 1663) の中ではスピノーザは實體に三個の規定を與へる、第一に存在はその本質に屬する、第二に實體は多樣ではなく單一、第三に夫々の實體は無限と考へられなければならぬ。更に「實體の發

實體と屬性について

動を余は様態と呼ぶ」と言ひこゝではじめて様態を規定してゐる。然し此の實體と様態の規定に對し、屬性に就いては何等觸れるところがない。しかもこゝで特に「延長を有する實體」が取り上げられ、それによつて實體の無限性、不可分性及び單一性が主張されるのである。即ち量 *quantum* は想像 *imaginatio* の中で實在するものと見做されるならばそれは可分的、有限的且つ複合的であるが、それが悟性の中に存し且つそれ自身の中で存する如く考へられるならば無限的、不可分的且つ單一であるといふのである。延長的實體はデカルトの有限實體であり、かゝるものが屬性と見做される點にスピノーザ主義の根本特質が存するとすればこゝでも實體として語られてゐるのは本來のスピノーザの意味で屬性に外ならないことが看取されよう。

(D) 前書翰に於ては何等神に言及されるところがないのである。書翰の三十九、四十、四十一（スピノーザよりハイゲンスに宛てる、一六六六年）の三書翰は専ら神に就いて語つてゐる。先づ書翰三十九に於ては神の定義から必然的に一なる單一の神が證明されるのであるが、此の證明は表現の上からエチカ第一部命題八の證明と極めて接近してゐる。然しより重要な意味を含むと思はれるのは次の第四十の書翰である。

即ちこの中では必然的實在を含む存在は次の諸性質を有しなければならないと言ふ。永遠性、單純性（部分より成るのではないこと）無限性（限定されないこと）不可分性、純粹な完全性の五つがそれである。しかし之等の諸性質が歸せらる可き存在は神と等置される實體ではなく、むしろ屬性或は實體的屬性（又は屬性的實體）と解される。それは續く次の叙述によつて示される。「更に如何なる存在も其自身の資格と力とに由り存在すべきであるといふことが自己の完全性より生じ得る故、若し我々は存在は其自身の本性によつて存在するが凡ゆる完全を表現するものではないと考へるならば、更に我々は其自身の中に凡ゆる完全を包む他の存在を想定しなければならぬ」(Ep. 40) かくてスピノーザは「余はその存在がその本性に屬する單一な存在のみがあり得ることを斷定する、かゝる其自身の中に



凡ゆる完全を含む存在を余は神と呼ぼう」(Ibid.)

かくて神は定立されるのであり、しかもそれと共に他の存在との関係も規定された。神は凡ゆる完全性(その他の存在は個々の完全性を有する、其はスピノーザ的にその種類に於ける完全と言つてもいいであらう)を自己の中に有して居り、しかも如何なる不完全をも含まない。凡ゆる存在の本性は神に歸屬し「必然的存在を含む單一なる神以外には何物もなし」(Ibid.)とスピノーチスムスの根本思想が確立される。然し此處ではなほ實體と屬性が語られるのではなく、一般的存在とそれと異なる他の存在即ち神が語られるのみであるが、凡ゆる完全を所有する神は實體であり、神の中にある完全を分有する存在は屬性であることは疑ふ餘地はない。それは更にハイゲンスに宛てた第四十一書翰によつても明に知り得るであらう。

スピノーザは言ふ。「余の第六の註に關しては、若しその種類の上からのみ限定されず且つ完全なる何物かゞそれ自身の能力によつて存在するならば、こゝで我々は絶對的に限定されず且つ完全にして一なる存在の在實を認めなければならぬ、と言ふのであり、かゝるものを余は神と呼ぼんとする。例へば我々が延長或は思惟(其等は夫々その種類の上から即ち與へられた存在の領域に於て完全である)は其自身の能力によつて存在することを斷定せんとするならば、我々は絶對的に完全なる神の存在即ち絶對的に限定されざる一なる存在の實在を認めなければならぬ。」(Ibid. 41) 自己自身の力によつて存在する唯一の絶對完全なる存在即ち神が存在する。それに對して例へば延長はその種類に於て完全であり無限である。それは神の絶對完全又は無限の中に含まれるものであり、隨つて延長は神に歸屬し、ある仕方で神の本性を表現する。かくてスピノーザは言ふ。「我々が説明のために延長に關して述べたことは同様な存在と見做される凡ゆる存在について主張されなければならぬ。かくして余は前の書翰に於ける如く神の外には何物もなく神のみが自己自身の能力によつて存在すると結論する」(Ibid.) この思想は明にエチカに見出される實

實體と屬性について

體と屬性との關係を示し、それは同時にスピノーザの根本思想と考へられるのである。

第三節 屬性について——屬性解釋の二類型

前節に於ては實體と屬性の概念が如何にして確立されたかをスピノーザの書翰について追及した。即ち兩概念の交錯と混亂を通じて絶対に無限的にして完全なる神が確立され此處にエチカの體系的基礎は成立しエチカ思想はこの起點として展開される。然し書翰によつて見た如くなほ屬性の本質は十分に明にされてゐない。随つて本節では更に屬性について考察を試み度いと思ふ。<sup>註</sup>

<sup>註</sup> スピノーザ哲學に於て最も論議の對象となつたのは屬性の問題であると言はれる。ツラウスキーによればスピノーザの屬性の解釋は三つ類型に歸せられるといふ。第一はエルドマンの解釋(Versuch einer wissenschaftlichen Darstellung der Phil. I Bd. Iab. (S. 53—98) Grundriss der Gesch. d. Phil. I Bd. S. 47—76) 第二はクローノ・ノイシヤー(Gesch. d. neueren Phil. I, Bd. II Theil II 4A. S. 371—395) 第三はトマン・マンブルグ(Historische Beiträge zu Philosophie III Bd. S. 227—S. 329) 然し上の三類型は實はワルテンによつて示されたものに外ならない。(R. Walten; über das Verhältniss der Substanz zu ihren Attributen in der Lehre Spinozas 1871) 此のワルテンの研究は極めて有意義であると思はれるが、フィッシャーの解釋に對して、エルドマン及びトレンデレンブルグを同一類型に屬する解釋と考へ得ると思ふ。そのことは本節に次第に明にされてゆく筈である。

さて、當面の問題の考察のためにフィッシャーの屬性解釋を手懸りとして進み度いと思ふ。フィッシャーは神の因果性の概念から出發し、神は凡ゆるものゝ原因であるならば總てのものは神の活動の結果であると言ふ。随つて神は單に内在的原因であるのみではなく同時に凡ゆるものを産み出す作用的原因と考へられる。かゝる作用的原因は即ち力

Kraftであり、それは凡ゆる現象を夫々一定の仕方で生み出すように働く。かくて「無數の現象があるが故に無數の力 Kräfteがある、その中に神の本質内實 Wesensfülle が成立する」(Fischer; S. 363)と主張する。それでは屬性は何であるかと言へば、かゝる神の諸力であり、屬性と神若しくは實體との關係は力 Kraftと根源力 Urkraftと根源的存在 Urvesenと同一の關係にあるといふ。此のフィッシャーの見解はたしかにスピノーザ自身の多くの表現の中にその論據を見出し得るように思はれる。既に挙げた書翰四十或は四十一等の中にも屬性を力であると解し得るが如き表現を見出し得る。然し前節の考察によつて示された如く書翰の多くの箇所では未だスピノーザの概念體系が確立されないことを思へばそこより早急に結論を導くことは危険であると思はれる。然し、神は絶対的完全性(凡ゆる完全の總體)であり、屬性は夫々の種類に於ける完全と考へられるならば、神の Machtvollkommenheit に對して屬性は夫々の種類に於て神の Macht を表現する Kraftと考へ得るであらう。

たしかに絶対的無限的な力としての實體即ち神はそれ自體としてはなほ無規定的であると考へざるを得ぬ。蓋し單に自己因たる實在は實體の直接的規定に止まり従つて未だ現實的にはたらく力として考へることは出来ない。神はむしろ屬性に於てはじめて自己因たることを示し得る。ツラウスキーは屬性なき實體は *contradictio in adjectio* でありそれは何物も産み出し得ざる力に過ぎないと言ひ、フィッシャーは「屬性は實體をはたらかしめる、然らざれば實體は硬化せる不毛の存在に過ぎず、不毛にして生命なき統一は凡ゆる區別が死滅するところの絶対者の夜である」(Fischer S. 384)と語る。かくて神の實在性、完全性は屬性によつて構成され、神の本質が力であるとすれば屬性も亦同一の力でなければならぬと考へられるのである。(Vgl. Eth. I Prop. IX, Prop. X Schol., Prop. XIX, II Prop. VI)

以上の如きフィッシャーの解釋は實體が絶対的な力であるといふ前提に立ちしかも實體と屬性とは本質的に同一であると考へるならば屬性は力であるといふ直接的表現の缺如にもかゝはらず十分な根據を持つと言はなければならぬ

實體と屬性について

い。然し此の解釋に對しても種々の立場より批難が向けられる。屢々なされる反駁の一つには（ワルテンもその一人である）延長と思惟の二屬性の中、少なくとも延長（空間）は數學的に考へて決して作用的な力とは考へられないといふことである。然し此の反駁は必ずしもフィッシャーの解釋に當つてゐるとは言へまい。蓋しスピノーザが屢々用ひる三角形の内和の和は二直角といふ數學的命題によつて示される如く實體の本質は論理的必然的に顯現するものであり、隨つて實體の力は決して單なる物理的な力ではない。むしろスピノーザの意味に於ては延長も亦力と考へる可きであらう。フィッシャー自身「デカルトの延長は無力 *Kraftlos* である」（Fischer S. 392）と言つてゐるところよりすればフィッシャーも上の如き意味で力を延長に認めてゐたことが推察される。或は實體 *Kraft* を屬性 *Kräfte* の原因であるとする場合、一なる力から如何にして諸力が生じ得るのであるか。實體が *Kräfte-erzeugend* なる *Kraft* であることは不合理ではないか。蓋し一なる力が種々の結果を生み出すといふ場合、その結果に於て再び多くの力が見出されるといふことは考へられぬからである。（B. Wahl: *Ueber das Verhältnis zwischen Substanz und Attributen* S. 11）然し此の批評もフィッシャーの屬性解釋の核心を衝くものとは言ひ難い。何となればフィッシャーの考へによれば實體は *Urkraft* であり *potenziell* な力であり屬性の力はそれに對して現實的に *aktuell* にはたらく力であると考へられるからである。

しかるに、フィッシャーの解釋の根本的な弱點となるのは正に、無限に多くの屬性に對して何故に二つの屬性のみが考へられるのであるかといふことである。フィッシャー自身言つてゐる如く無數の現象がある限りそれに應じて無數の力が屬性として考へられなければならぬ。そのことはフィッシャーの立場から如何に解決されるのであるか。然し此の問題は單にフィッシャーの屬性解釋に於ける困難であるのみではなく深くスピノーザ哲學の根本的なアボリヤを形成するものゝ如くである。

神が無限に多くの屬性より成ることはエチカ第一部定義六に定立されて居り、此の思想は書翰の中に於ける無數の實體＝無數の屬性、一なる絶對的無限的存在と無數の存在、一なる存在の絶對的完全とその種類に於て完全なる存在等の思想の中に胚胎してゐると考へられる。しかも無限に多くの屬性の思想は明に唯一の絶對的無限實體即ち神の定立を俟つてはじめて明確に現はれて来る。その理由は明白である、スピノーザによれば凡ゆる限定は否定であり、随つて絶對無限的存在 *ens absolute infinitum* は絶對無限定的存在 *ens absolute indeterminatum* に他ならない。故に又神の自由は凡ゆる規定からの自由を意味する。一限定は積極的なものを含まずして單に限定されると考へられるところの本性の實在の制限のみを含む故、定義が實在を主張するものは限定されたものとは考へ得ない」(E.p. 41)と言はれるのである。随つて神は絶對的實在としての自己の本質に於ては數的限定を排除する無限に多くの屬性を要求する。蓋し神が有限數の屬性のみを有するとすれば、神の力はそれ等の種類に限定されることになり神の絶對無限性と矛盾するからである。

ところで此處に無限に多くの屬性を想定す可き必然的根據があるとすれば、唯二つの思惟と延長のみを擧げることは何としても不齊合的であると言はざるを得ない。スピノーザは書翰の若干の箇所にて延長を屬性の例として語るのであるが(書翰に於ては思惟については餘り語られてゐない)爾餘の屬性については觸れるところがない。しかも「思惟は神の屬性である、或は神は思ふものである」(Eth. II Prop. 1)「延長は神の屬性である、或は神は延長を有するものである」(Eth. II Prop. 11)と二個の命題が掲げられるのであるがこゝでは神の屬性を明に二個に限定してゐる如く考へられるのである。此處に我々はスピノーザの矛盾を見ることが出来るのであるが、此の矛盾にフィッシャーの屬性解釋は蹟くのであり、彼自身問題の解決を斷念するものゝ如くである。(Vgl. Fischer: *ibid.* S. 394)

偕て上述の困難に對して解決の手懸りと思はれるのは「屬性とは悟性が實體について、その本質を構成するものと

實體と屬性について

して認識するものであると解する」(Eh. I Def. IV)なる定義である。この定義と極めて類似する表現が書翰の中に見出されることは既に前節(Ep. 27)に於て示したところである。これ等の思想より導き出される直接の歸結は屬性とは實體の悟性的規定であるといふことでなければならぬ。若しくは悟性的規定が定義と解されるならば屬性は一なる實體に與へられた種々の側面からの定義といふことになるであらう。端的に前者の立場に立つのがエルドマンであり、後者に屬するのはトレンデレンブルグの解釋であるが、兩者は共に屬性を悟性に於て in intellectus 把える限り根本的に異なるものではない。此の立場はフィッシャーの見解とは對蹠的であり、フィッシャーがエルドマンに對して極めて鋭犀なしかも綿密な批判を加へつゝ自己の見解を叙述する所以も理解し得るところであらう。

さてエルドマンの屬性解釋は根本的に次の表現によつて要約される。「性は本質の差違 Wesensunterschied を實體へ歸入するものではない」「單に考察する悟性の解釋の仕方 Aufassungsweisen を示す」(Erdmann: Grundriss der Gesch. d. Phil. II Bd. S. 58)これに對してフィッシャーは第一に神若しくは實體は屬性から成る、第二、夫々の屬性は永遠にして無限の本質を表現する、第三に屬性は實體の如くに絶對的に無限ではなくその種類に於て無限であるといふ點に於てのみ區別される、といふ三つの點より批判を加へる。<sup>註</sup>

註 此の批判を要約すれば第一にスピノーザに於ては神が屬性より成るがエルドマンに於ては屬性は實體に對しては單なる外的賓辭である。第二に屬性は本來永遠にして無限なる本質の表現であり悟性の外にあるのであるが、後者に於ては屬性は有限的(人間)悟性の中にあつて永遠でも無限でもない。第三にスピノーザによれば屬性は實在であるがエルドマンによれば屬性は實在性を有しないことになると言ふ。(Fischer; S. 375 ff.)

かゝるフィッシャーの批判は決して誤つてゐないのみならずエルドマン的解釋の根本的弱點を衝いてゐることは認めざるを得ない。然し問題は決してこれに盡きるのではない。

先づ第一に屬性と悟性との關係を示すスピノーザの定義四は全く無視されてゐるのか。或はフィッシャーの主張する如く書翰二十七は決定的意味を有するものではないと斷定されてゐるのであるか。ともあれワルテンの主張する如くフィッシャーの解釋に於ては悟性と屬性との關係は背後に退いてしまふと認めざるを得ない。フィッシャー自身もとり上げてゐる如く定義四の命題は文法的曖昧さを含むことは屢々指摘されて來たところである。<sup>註</sup>然しそれが如何に解釋されるにせよ、こゝで表現されてゐる屬性と悟性との關係が否定されることは出來ないであらう。

註 Def. IV *Per attributum intelligo id quod intellectus de substantia percipit tanquam ijsdem essentialibus constituentibus.* フィッシャーによれば、この分詞 *constituentibus* が *intellectus* にかゝるか、*quod* にかゝるか、問題だといふ。第一の場合には *quod* 以下 *was der Verstand von der Substanz erkennt, indem er gleichsam deren Wesen ausmacht feststellt* (この場合にはヘルマン的になる) 第二の場合には *was der Verstand als Wesensbeschaffenheit der Substanz erkennt* であるがフィッシャーは Eth. II Prop. VII Schol. を引合ひに出し後者の正しいことを主張する。ヘッセルも此の見解を採用するが、R. ツールは上のフィッシャーの解釋を認めつゝ更に *tanquam* が *als* 若しくは *gleichsam* の何れであるか、問題だといふ。フィッシャーの上の解釋に於ては *als* とされてゐるのであるが、少なくとも定義四の解釋に關する限りフィッシャーの主張の正しいことは承認されねばならぬ。

それでは上の定義四は何を意味するか。明に認識の立場であり、隨つて屬性をもつて「單に實體に對する外的賓辭」となすことは出來ない。何となれば認識は本質自體の認識であり單なる外的規定以上のものを含むと考へられるからである。それ故我々は認識の立場よりしてエルドマンの解釋を修正しなければならぬ。即ち屬性は單に悟性の中の主觀的規定として見らる可きではなく、むしろ實體の本質、實體そのものを認識する悟性の客觀的規定であるといふことである。ワルテンはフィッシャーは屬性の客觀的規定を主張する限りに於て正しいと評する。しかし客觀的規定が規定である限りに於て少なくともスピノーザ的には其は悟性的規定である。しかも悟性的規定は決してフィッシャーの

實體と屬性について

主張する如く屬性の實在性と矛盾するものではなくむしろそれによつて屬性の實在性（それは眞實には實體の實在性であるが）が認識されるのである。随つて、悟性的規定は（スピノーザの意味に於て）決して單に實體に對する外的の賓辭ではなく、その深い意味に於て實體自體の自己規定と考へなければならぬ。この點に於てトレンデルンプルグの定義説も外面的形式的たるを免れないであらう。かゝる意味に於て實體と屬性とは同一であると言つていいのであるが、然しそれは飽く迄直接的同一ではなく悟性に媒介された否定的同一と考へなければなるまい。悟性は勝義に於て區別でありかゝる點に於て「悟性に於て in intellectus は「その種類に於て」 in suo genere と對應するとも考へることが出來よう。

それではフィッシャーによつて殘された無限に多くの屬性と二つの屬性との問題は此の認識の立場より如何に解されるであらうか。勿論エルドマン自身拒否してゐる如く、これを以つて直ちにカントの物自體と現象との關係と見做すことは出來まい。蓋し、カントに於ては物自體は不可認識的であつて、認識能力は絶対に現象の領域を超えることは出來ないのであるが、スピノーザに於ては實體は少くとも思惟と延長との二屬性に關して實體自體の悟性的認識が可能と考へられるが故である。然し實體には無限に多くの屬性が歸屬すると考へられる限り、思惟及び延長以外の他の無限に多くの屬性は悟性によつては認識し得ないと考へる外はない。此處にスピノーザの哲學とカントの思想とは其の問題定立に於て根本的に異なるにも拘はらず、<sup>註二</sup>等しく人間理性の限界の問題を含むと考へざるを得ない。

然しながら實はこの様な解釋は更にスピノーザ思想體系の根本的矛盾に直面せざるを得ないのである。それは如何なる意味に於てあるか。

註一 キューネマンはスピノーザの合理的認識論的側面を強調しスピノーザの思想を intellectus sive natura なる定式に示す。且つスピノーザを以つて批判的思想家の系列に屬するものであると主張するが (E. Kühnemann: Ueber die Grundlagen der Lehre



des Spinozas S. 12f.) が、この見解は一面的であり、ゆき過ぎであると言はざるを得ない。

註二 勿論キューネマンがスピノーザとカントとを同一視するのではなくスピノーザの体系は「純粹理性の体系」であり随つて「純粹理性批判」はスピノーザに對して特別に書かれたものであると言ふ。随つてカントは其の著によつてスピノーザに對して最大の尊敬を表明するものであり、哲學に於ては Spinoza oder Kant なる唯一の選擇が残されると主張する。(Ibid. S. 64~70)

#### 第四節 体系の根本性格——二方向と其の矛盾

さて前節に示した屬性の認識論的解釋は一應、無限に多くの屬性と二つの屬性との問題を解決してゐるものゝ如く見えるのであるが、然しそれは少くともスピノーザ自身の中から直接引き出し得るものではない。それに關してチルンハッゼンとスピノーザの間に交はされた書翰は注目に値するであらう。チルンハッゼンは「我々は思惟及び延長以外に神の如何なる屬性をも知り得ないのであるか」(Ep. 66)と問ふのであるが、其に對してスピノーザは次の如く答へる。精神の本質は唯現實に存在してゐる肉體の觀念であるものゝ中に於てのみ成り立つ。(Eth. II Prop. XIII) 故に人間悟性の能力は身體の觀念が自己の中に含み若しくはそれから生ずるものに對してのみ役立ち得る。ところが此の身體の觀念は延長及び思惟以外の神の屬性を含まず且つ表現し得ない。その理由は身體は神が他の屬性ではなく延長の屬性の下に考へられる限り神を其の原因とする。(Eth. II Prop. VI) 随つて (Eth. I Ax. V I) 此の身體の觀念は神が延長の屬性によつて考へられる限り神の認識を含む。同様にして此の觀念は神が思惟の屬性によつて考へられる限りに於てのみ神の認識を含む。それ故に人間精神若しくは人間の身體の觀念は此の二つ以外の神の如何なる屬性をも含まざることは明白であると結論する。

ところで上述のスピノーザの證明はチルンハッゼンの間に對しては不完全なものであることは容易に氣付かれる。

實體と屬性について

實體と屬性について

何となれば「此の身體の觀念は延長及び思惟以外の神の屬性を含みもせず若しくは表現もしない」といふ命題に對し其の理由として述べられる後半の説明に於ては單に身體の觀念が延長及び思惟といふ神の屬性を含むといふことの説明であつてそれ以外の屬性に就いては何等言及されてゐない。随つて此の説明はチルンハッゼンの間に對して答へるものではないと共に我々の當面の問題に解決を與へてくれるものでもない。チルンハッゼンは勿論上のスピノーザの説明の不完全を明に認めたと解される。蓋し彼はエチカ第二部命題七の註を論據として我々の精神を構成するところの發動（それは又身體を構成する發動であるが）は神に於ける無數の屬性によつて表現されることが證明し得ると婉曲に反駁してゐるからである。

随つて我々はスピノーザ自身より我々の當面の問題の解答を得ることは不可能の如く見えるのであるが、上述の彼とチルンハッゼンとの間に於ける問答は少なくとも我々に屬性問題の位置を示してくれるものゝ如くである。即ち屬性の問題は認識の問題であり、しかもそれは人間精神の問題に歸するといふことに外ならない。

それではスピノーザに於て悟性とは如何なるものであるか。彼は言ふ「有限にせよ、無限にせよ現實の悟性は神の屬性及び神の發動を包括して、他の何物をも包括する筈がない」（Eth. I Prop. XXX）この命題は定義四の思想に相應するものと解される。しかも此の命題の説明の中に見出される表現「悟性の中に客觀的に包含されてゐるものは……」は明に悟性は單に主觀的ではなく客觀性を持つことを示してゐると考へられる。随つて、此の命題は定義四と共に屬性の認識論的解釋を支持するが如く思はれるのである。然し續く命題は此の解釋に對して重大な支障の存在を暗示する即ち三十一命題は「有限にせよ、無限にせよ、現實の悟性は意志、欲望、愛等と同様に能產的自然 *natura naturans* ではなくて、所產的自然 *natura naturata* に數へられなければならない」（Eth. I Prop. XXXI）こゝで能產的自然とは實體及び實體の屬性であり、所產的自然とは「神の性質又は神の各屬性の必然から起る總てのもの、即ち神の中に在

り神なくしては存在し且つ考へ得ざるものと見做される限りに於て神の屬性の總ての様態と解する」(Eh. I Prop. XIX Schol.)と規定される。上の相連續する二命題の間には明白に矛盾が存すると考へざるを得ない。蓋し前者に於ては現實の悟性は神の屬性を包括するのに對して、後者に於ては現實の悟性は所産的自然に屬し神の屬性から必然的に起るものであると言はれるからである。

スピノーザの體系よりすれば人間の悟性又は人間の精神は様態以外の何物でもあり得ぬ。されば屬性の認識論的解釋に於て屬性は悟性的規定であるとすれば、悟性が様態と解される限りに於て屬性は様態によつて規定されることにならざるを得ない。換言すれば屬性は様態たる悟性を前提し、悟性即ち様態なくしては屬性は思惟されないといふ結果に陷る。随つて屬性を悟性的規定と見做すことはフィッシャーの主張する如くスピノーザの根本概念の秩序とは絶對に相容れないものと言はざるを得ない。蓋しスピノーザの體系は實體—屬性—様態の秩序を有するものであり、此の秩序を改變することはスピノーザ主義の否定に外ならないと考へられるからである。しかも屬性を様態によつて規定することは屬性を様態化することを意味し、それはフィッシャーの極力警戒したところであつた。即ち彼はエルドマンの屬性解釋を認識形式といふ側面より形式主義的解釋 Formalistische Auffassung となし上述の様態化の側面より様態主義的解釋 modalistische Auffassung となし斥けるのである。<sup>註</sup>

註 「若し多くの屬性は、認識する精神が神について必然的に有する多くの表象の仕方過ぎないといふなら、スピノーザ主義を批判的認識論の眼鏡を以つて考察することになる、然しその際には一方に思惟の屬性が既に前提されてゐること、地方に於て、スピノーザ說の中にはあり得ないのであるが、有限的精神に神性に相對抗する獨立性が歸せられることになるであらうといふことが忘れられてゐる」(Windelband; Die Geschichte d. n. Phil. I 6A, S. 219) 此のワインデルバンドの敘述は彼も亦屬性解釋に於てフィッシャーと同一方向に立つことを示してゐるであらう。

かくてスピノーザの體系を前提とする限りに於て屬性を悟性的規定とすることは許容されないといふより外はな

實體と屬性について

實體と屬性について

い。何となればスピノーザの體系に於ては唯一な絶対無限の實體即ち神が定立され、凡てはそれより必然的に導出されなければならないからである。かゝる實體はその屬性と共に能産的自然であり、それに對して悟性は様態若しくは所産的自然である。しかも後者は如何なる意味に於ても（論理的にも實在的にも）能産的自然を規定することは出来ない。それにも拘はらず我々は屬性の認識論的解釋はその實在論的解釋と相並んでスピノーザの思想自身の中に夫々根據が見出されると考へざるを得ない。それは一體如何なることを意味するであらうか。我々は別個の觀點よりスピノーザ主義の根本性格を考察することの必要に迫られるのである。

既に第一節に於て示した如く神は凡ゆる世界存在者若しくは現象の非人格的基體であり、かゝるものとしてスピノーザの神は凡ゆる人間的規定を徹底的に排除する。若し神の永遠なる本質に悟性と意志が屬するとすれば、それ等は人間の悟性及び意志と同一の名を有するにも拘はらず「星座の犬と吠える犬」(Eth. I Prop. XVII Schol.)との如く天地の相違を有する。それと共に神は絶対の原因として永遠的な必然性によつてはたらしき絶対の因果性として凡ゆる目的概念を決定的に否定する。しかも神に於ける絶対の必然性は直ちに神の絶対の自由を意味し(Eth. I Def. VII, Prop. X VII Cor. II, Prop. XXXII) 隨つて神は所謂意志の自由によつてはたらくものではなく、(Eth. I Prop. XXXII Cor. I) 神より生ずる凡てのものは唯、神の絶対的必然性より生ずる。(Eth. I Prop. XXXIII) かゝる點にスピノーザは Determinismus 決定論若しくは Fatalismus 宿命論と評される所以が存するのであるが、これ等の思想はあく迄神の人間化或は神を人間的概念によつて捉へることを拒否せんとするものであり、それは又スピノチスムスの根本前提たる神の絶対無限性を主張せんとするものに外ならない。(エチカ第一部「補遺」参照)

ところで上の如き神の人間化の否定は必然的に神の自然化の方向と結合する。即ち神が意志として目的々にはたらくのでなければ世界は神的意志の製作ではない。隨つて世界は神によつて創造されたものではなく、唯神の本質

(力)の必然的永遠的な顯現と見做されなければならぬ。故に世界秩序は事物の因果結合として理解さる可きでありかゝる因果結合に對しては神は唯一にして第一なる自由の原因として考へられる。しかも世界の全體的秩序は自然であり神は其の内在的原因であるとすれば、世界は *natura naturata* であり神は *n. naturans* である。然し神は根源的な力として自然に内在するとすれば、神と自然とは別個のものではない。随つて此處に *Deus sive natura* なる定式が妥當し、フィッシャーは「神概念は完全に自然化された」(Fischer; S. 263) と言ふのである。<sup>註</sup>

註 ウィンデルバントはスピノーザの神は無限に多くの次元より成る空間であり、幾何學的空間が三次元から成る如く神は無限に多くの次元(それは屬性であるが)成ると言ふ。(Windelband; Gesch. d. n. Phil. S. 219f.) たしかに書翰の中で屬性的なるものとして語られるのは主として延長であり、そのことは實體は全く延長的存在であるかの如き感を與へる。ウィンデルバントの解釋は神及び屬性の最も徹底した實在論的解釋を示してゐるのであるがその限り屬性の解釋に於てはフィッシャーと同一方向にあるものと解される。然し上述のウィンデルバントの解釋は極めて鋭いものを含むに拘はらずスピノーザの全体思想から言へば一面的であり比喩以上のものではないと考へざるを得ない。こゝに神の自然化と神の空間化は同一範疇に屬すと見做されるならばそれ等を神に關する實在論又は實在主義の立場と考へてもいいであらう。

さてスピノーザの體系はかゝる絶対無限的實體を根本前提としその基礎の上に思惟的存在と延長的存在との嚴密な並行論が確立される。「觀念の秩序及び聯結は物の秩序及び聯結と同一である」(Eh. II Prop. VII) 人間の精神を形成する觀念の對象は身體若しくは現實に存在する延長の或る様態である」(Eh. II Prop. XIII) 其の他エチカ第二部に見出される精神と身體とに關する命題は明にそれを示してゐると考へられるであらう。然しワルテンが指摘する如く次第に兩者の嚴密な並行關係は破れてゆくことを認めなければならぬであらう。即ちエチカに於ては漸次思惟が優位的となり、延長的存在は思惟の屬性の對象となるが如く随つて思惟は實體の直接的表現であるのみならず凡ゆる様態を包む如く思はれる。(Eh. I Prop. XXX) しかも人間の精神に就いては「神の無限なる悟性の一部」(Eh. II Prop. XI

實體と屬性について

(Cor.)と言はれ、或は「これ等の精神の觀念の實在並びに精神の實在は同一の必然性を以つて思惟の同じ力から神の中に起る」(Eth. II Prop. XXI Schol.)「従つてこれ等の觀念の觀念は、神が人間の精神の認識或は觀念を有する限り神の中になければならぬ。即ち人間の精神自身の中になければならない。それ故に人間の精神は身體の發動のみならず、その觀念をも認識する」(Eth. II Prop. XXII Dem.)と言ふ。かくて思惟は觀念の觀念として自己自身をも且つ又實體の妥當的觀念によつて實體自身をもその認識の對象となす可きであると考へられる。エチカ第二部は第一部の神概念の基礎の下に精神と身體との嚴密な並行論より出發するのであるが、以上の如くして思惟する精神は決定的優位を占めると言ひ得る。かくて第二部は觀念についての思想展開であり其は又根本的にスピノーザの認識論を示すものであると考へてもいいであらう。

ところでスピノーザの認識論は獨立的に一悟性改良論「Tractatus de intellectus emendatione」に展開されるのであるが、エチカの中に於ても根本的に同一の思想の上に立ち三種の認識が區別される第一種の認識は臆見 *opinio* (感覺による) 及び想像 *imaginatio* (聯想、記號による) によるもの、第二種の認識は理性 *ratio* によるものであるが其によつて一般的觀念 *ideae communia* 及び妥當的 *adequate* な觀念が與へられる。これは謂はゞ悟性的認識若しくは概念的認識であつて眞理の抽象的把握とも考へられる。第三種の認識は直觀知 *scientia intuitiva* であり「神のある屬性の形式的本質の妥當なる觀念から物の本質の妥當なる認識へ進む」(Eth. II Prop. XXXX Schol. III) と言ふ如く物の眞理の具體的把握である。随つて理性は概念的推論の形によつて一般的なるものを捉へるのであるが直觀知はむしろ事物の本質を直接的に把握すると考へられよう。<sup>註</sup>

註 我々はこゝに擧げられる認識の種類に關しても亦屬性の問題が生じて來ることに氣が付く。即ち前掲の引用文に示されてゐる如く第三種の認識は神の屬性の認識を前提してゐるのであるが、そうすれば神の屬性の認識は第二種の認識に屬してゐると考へ

る外はない。その場合それでは直観知の対象は何であるか。定理四十四の系二によれば「理性の性質には物を永遠の形式の下で認識することがある」といふが、其の上理性の基礎は凡ての物に共通なるものを説明して或る個物の本質を説明するものではないと言ふ。とに角第二の理性による認識と第三の直観知の認識との關聯は明確でないと言はざるを得ないが、屬性は理性的認識の対象として一般的概念に屬すると解されるものゝ如くである。

かくてスピノーザの認識論は決定的に合理主義であり、それは「人間の精神は神の永遠無限なる本質の妥當的認識を有する」(Eth. II Prop. XXXVII)なる命題に導かれる。人間精神は理性として凡ゆるものを包括するのであり、存在の總體を自らの中に有する。随つて絶對的無限的實體はその屬性及び様態と共に思惟の中に包攝され、その中に於てはじめて眞理性が獲得される。ここにフィッシャーがスピノーザ主義を *Deus sive natura* と表現するのに對して、キューネマンは其を *intellectus sive natura* とす所以が存するのであらう。

さて以上の如き合理的認識論的方向はスピノーザの根本前提たる自然的實在論的方向と齊合的に結合し得るか否か。其に對する答へは既に明白であらう。屢々繰り返へした如くスピノーザの根本前提は實體の絶對的な實在的定立である。かゝるものとして神は無規定的な力として自然そのものである。(我々はここにゲーテの自然觀を想起するのである)ここにフィッシャーの言ふ神の自然化が存するのであるが、かゝる實體の本質が屬性によつて表現されるとすれば、屬性も亦無規定的な力と解されざるを得ぬ。フィッシャーの屬性解釋はかゝるスピノーザの自然的實在主義の必然的な歸結と言ひ得る。勿論フィッシャーは決してスピノーザの合理主義的方向を無視するのではなく、随つてスピノーザの矛盾を鋭く指摘してゐるのではあるが少なくとも屬性解釋又はスピノーザ解釋に於ては合理的認識論的側面は一方的に輕視されてゐると考へざるを得ない。それに對してエルドマンに於てはスピノーザの根本前提は無視され(彼はスピノーザの實體を凡ゆる存在者の論理的前提と解する)一方的に合理的認識論の立場に立つものと言ひ得る。而

實體と屬性について

して屬性を以つて實體の悟性的規定と解する屬性の解釋は明に後者の立場よりの必然的歸結と言ひ得る。随つて、スピノーザの屬性解釋の二つの類型は根本的にスピノーザの哲學を流れる二つの方向、實在論(非合理主義)と觀念論(合理主義)に夫々對應するものであると考へることが出來よう。しかも前者に對して後者は決して第二次的な意味を有するものではなく、前者と相並んでスピノーザ主義の根本性格を形成するものと考へざるを得ぬ。彼の汎神論はかゝる二つの異質的な根本方向を包含して特異な思想體系を有するものであると言ひ得るであらう。ワルテンは此の二つの方向を次の如く語る「此の體系は一方に於て理性及び精神を自然から導出せんとする試みであり、随つて思惟の凡ゆる規定は一なる自己自身についても思惟せざるところの原理の流出 *Ausfluss* として理解される。他方に於てはそれは全體自然をば精神及び理性から導出せんとする試みであり、随つて凡ゆる實在は單に理解されるもの *Begriffenes* として明晰判明なる認識の歸結たるの價值と意味を有する。彼に於ては實に全體は自然の概念の中に結合される、彼にありては自然も理性も實際は實體でありそれ等は自己の中に存するのみではなく又自己自身によつて理解されなければならぬ」(R. Walten; Ueber das Verhältniss der Substanz zu ihren Attributen in der Lehre Spinozas S. 39) この叙述はより簡潔にフィッシャーの *Deus sive natura* とキョーネマンの *intellectus sive natura* の二つの定式によつて示し得るであらう。我々がエチカの第一部と第二部との間に看取し得る不齊合はかゝる二つの根本的方向の間に於ける矛盾に由來するものと考へられる。<sup>註</sup>

註 リュールマンは同様にスピノーザの合理主義と自然主義の二つの方向をとり上げ「神の愛は嚴密な合理主義と結合し得るものではない、しかもなほ自然主義とも齎合的に結合するものではない」(C. Lülmann: Ueber den Begriff Amor dei intellectualis bei Spinoza S. 40)と主張する。これは又スピノーザの二つの方向の矛盾を神の知的愛の考察より示すものと考へ得る。

それでは上述の如きスピノーザの二方向及びその間の矛盾は我々に何を示し、又それを通じて我々に如何なる眞



理を開示するものであらうか。

## 結 語——スピノーザ主義の眞理

スピノーザに於ける絶對無限的實體たる神の直接的定立は單にエルドマンの言ふが如き體系の論理的前提ではなくスピノーザの根本確信と考へざるを得ない。しかもその本質が存在を含むといふことは神に於ては思惟と存在は同一であるといふことに外ならないであらう。逆に言へばかゝる本質と存在との直接的同一性によつて神の絶對的無限性は保證されるとすれば本質と存在との分離は神の絶對無限性を否定するものと言はざるを得ない。而して本質と存在の分離とは思惟と存在との分離であり其は存在自體に對する悟性の媒介による規定を意味する。随つて神の絶對無限性を確保せんとすれば凡ゆる規定は排除されなければならないことになる。即ちスピノーザの言ふ如く限定は制限であり否定でありそれは神の絶對的完全性とは矛盾するからである。随つて神は肯定的な賓辭によつて規定さる可きではなく、むしろ神の本性はそれ自體に於て否定によつて *via negationis* のみ捉へられなければならない。かゝるスピノーザの否定神學的思想はマイモニデスの影響によるものと言はれるのであるが、ウィンデルバントは此のスピノーザの否定神學的性格を次の如く叙してゐる。「スピノーザにとつては神性は總てあると共に無 (*nichts*) である、彼の神についての説は全く神秘主義の方向に存する」(Windelband: *Lehrbuch der Gesch. d. Phil.* S. 344) たしかにスピノーザの神はその性格を徹底することによつて無的なものに歸する方向を持つであらう。

然しそれは決してスピノーザの眞意ではない。むしろかゝる神を如何にして認識し神の知的愛に迄導くかゞスピノーザの根本意圖であつたことは疑ひ得ない。しかも他方に於て深くデカルトの合理主義の影響を受けたことは彼の體系の基礎概念がデカルトに發してゐることによつても明白である。こゝに神を合理的に——それは彼の幾何學的方法に

實體と屬性について

も見られるのであるが——認識せんとするスピノーザの根本的意圖が存する。しかしかゝるスピノーザの根本意圖と先に示した根本前提との間に彼の體系的矛盾が胚胎するものと考へざるを得ない。

かゝる矛盾をスピノーザ自身必ずしも認めざるものではないことは「絶對的に無限なる實在としての神に就いてこれを語る程不條理なことはない」(Eh. I Prop. XV Schol.) なる言葉によつても知られるであらう。しかも「人間の精神は神の永遠無限なる本質の妥當なる認識を有する」(Eh. II Prop. VXXXVII) と言はれるとき此の全く矛盾する兩者の間には明に自然主義的實在論から合理主義的認識論、神より人間への立場の轉換が看取される。屬性の概念は此の二つの立場の轉換點に定位し、スピノーザ自身の屬性に關する矛盾的規定は彼自身の體系に内在する二方向の間に於ける矛盾を示すものに外ならない。しかも此の內的矛盾は無限に多くの屬性と延長と思惟との二つの屬性との問題に於て完全に露呈されると考へられるのである。

前者の觀點よりすれば屬性は實體と同一であり、實體が根源力 *Urkraft* であるとすれば屬性は同一のしかも無限に多くの力 *Kräfte* である。更に様態が實體の發動 (Eh. I. Def. V) であると考へられるならば、様態も亦根本的に同一なる力 *Kraft* でなければならぬ。こゝに於て總ては神に歸し世界は神の中に無差別的に解消しヘーゲルの評するが如く無宇宙論 *Akosmismus* にならなければならぬ。しかもそれによつて再び實體は「絶對者の夜」*die Nacht des Absoluten* (フィッシャー) 或は「形而上的無」*das metaphysische Nichts* (ウィンドエルバント) に歸せざるを得なくなるであらう。之に對して後者の立場より屬性を實體の悟性的規定と見做すならば人間精神は様態であることによつて必然的に實體の様態化を導きそれと共に實體の絶對的無限性の前提は根本的に否定されざるを得ない。しかもそれはスピノーザの體系の崩壊を意味するといふ結果に導かれるのである。

無限に多くの屬性はスピノーザの根本前提に基く必然的要求であるが、屬性が神の本性を表現するものであれば神

は自己の本性を無限に多くの屬性によつて残りなく顯現するものでなければならぬ。然るにその中の延長と思惟の二屬性のみが知られるといふことは明白に人間の有限的認識能力を示してゐると考へなければならぬ。その場合「人間の精神は神の永遠無限的な本質の妥當的認識を有する」とは如何にして主張し得るのであるか。むしろ我々は神については非妥當的認識を有するのみであるといふ他はないのではないか。さればリュールマンも「スピノーザの體系の意義より判定されるならば、人間精神は神的本性の内實Enteを妥當的に認識することは出来ない」(Ullmann, Ueber den Begriff Amor dei intellectualis bei Spinoza S. 27) と主張するのである。然し様態たる人間悟性が「神の無限なる悟性の一部」として其の無限性が主張されるのであれば神の屬性は悉く我々に知られる筈ではないか。その場合には凡ては人間精神の中に包括され、理性は絶対の包括者として凡ゆるものを精神の觀念に歸入してしまふことになるであらう。

之等の錯綜するスピノーザの矛盾は總て先に示したスピノーザの根本的な二つの方向、即ち自然主義的實在論と合理主義的認識論との交錯より生ずると考へられるのである。それではかゝる二方向を内在的に有するスピノーザの矛盾の究極の根源は何處に由來するか。それは恐らくスピノーザの根本前提たる絶対的無限的な神の直接的定立に基因するといふより他はないであらう。何となれば神の絶対實在性を前提とする限り、神の合理的認識はその前提と結合するものではない。否、その前提を嚴密に維持せんとすれば我々は最早神については何物をも語り得ない。それは又ウィンデンバントが言ふ如き神秘主義の立場にならざるを得ないのであり其と共に其處では一切の哲學的思惟が斷念される外はない。しかもそれにもかゝらずスピノーザが神の認識を意圖せんとすれば必然的に自ら前提として立てたる神の絶対無限性に躓かざるを得ぬ。随つてスピノーザの體系は神より出發し神に躓くものであると言ひ得るであらう。

實體と屬性について

然しかゝる矛盾はひとりスピノーザ哲學に於ける矛盾であらうか。恐らくそうではあるまい。それは神の無限性と人間の有限性との間に於ける永遠の矛盾と考へられるのではないであらうか。或は又神の思惟に於ける永遠のパラドックスとも言ひ得るのではなからうか。我々は此處に於て單にスピノーザ哲學の矛盾を指摘するに止まらず、その矛盾の中に秘む永遠的眞理を把えるのでなければならぬ。

ところでスピノーザの神概念を端的に否定し去ることは少なくともスピノーザの思想の中に眞理を認める所以ではない。随つてスピノーザを以つて「論理的關係を不注意に存在へ移行した」といふ觀點より「無限に多くの屬性を持つた絶對的實體は完全に無根據であるのみならずして更に不合理な假説である」(A. Thilo: Spinozas Religions-Philosophie 58) の如き見解には全く同意することは出来ない。それでは我々は如何なる意味に於てスピノーザの眞理を見出し得るであらうか。

スピノーザの哲學は神の直接的定立を前提とする限りに於て(それはカントの言ふ獨斷論 Dogmatismus であるが)その自らの前提に躓くのであるが、然し神の絶對的無限的實在性を止揚することはスピノーザ哲學體系を端的に否定する結果になる。此處に於て我々には唯一つの道のみが残されるであらう。それは即ちスピノーザの體系的秩序を變更することに他ならない。フィツシャーがエルドマンの屬性解釋に對して「彼は體系の中に與へられた根本概念の秩序を變更する」(Fischer: S. 372)と評するのであるが、スピノーザの實體概念を止揚することなくしてスピノーザ主義を齊合的に生かさんとすれば、その概念秩序を變へる以外にはないではなからうか。然し勿論それは實體を論理的前提と見做し、且つ屬性をもつて單なる悟性の主觀的規定となすエルドマンの立場に立つことを意味するものではない。それは實體―屬性―様態の秩序を逆轉した様態―屬性―實體の秩序を以つて置き換へることに外ならないのであるが其は様態たる人間の精神より出發し絶對的實在なる神の認識へと進むこと、若しくは認識論より發して神の實在へ進

むといふ方向を意味する。然しそれは又スピノーザを彼によつて超えられたデカルトの *conception* の立場に單純に還るといふことを意味するのではない。蓋しスピノーザの精神に於ては飽く迄神は人間的規定を超えた絶對的實在でなければならぬからである。

此の方向はカントの批判哲學に見出されると言ひ得るのであり、粗雜な表現が許されるならば批判主義と獨斷論との根本的な相違は形式的に體系的秩序の相違に在るとも言ひ得るであらう。然しこゝでもカントの神は人格的神であり、世界創始者、世界主宰者、道德的立法者でありそれはスピノーザの極力排斥したものであつた。スピノーザの神はカントに於ける如く實踐理性の要請として道德性の立場より定立される如きものではなく、むしろ絶對の實在でありしかも人間の立場と神との間には無限の距離と絶對の乖離とが存するのである。換言すればスピノーザ的な神は人間に對しては絶對の超越者である。かゝる神の認識に對しては人間の有限的精神は全く無力であるといふより他はないであらう。屬性による悟性的なる實體の規定は決して神についての妥當的認識を與へるものではない。

かゝる人間と神との距離は唯絶對の飛躍 *Springung* によつて主體的に越えられる外はない。この飛躍を通じて神は絶對的な超越者として自己存在に對する絶對他者として自己の根源より確信されるものと考へられる。勿論此の飛躍は神秘的若しくは無媒介的に可能なのではなく根本的に思惟を通じて深く人間の有限性が自覺されるといふことに由るのでなければならぬ。即ちそれは人間の有限的悟性を以つてしては神の絶對無限性に到達し得ないといふ絶對の無知を明にすることに外ならないであらう。然し數學的分析的な理性 *Ratio* に止まる限りかゝる神への超越的思念の道は塞がれてゐる。それを可能ならしめるものはスピノーザによつて其の對象が示されずしかも單なる示唆に止まつた直觀知の立場でなければならぬ。直觀知の認識が神の屬性の形式的本質の認識即ち悟性的認識を前提とするといふのも、後者より前者への連續的移行が可能であるといふ如き意味ではなく理性を否定的媒介として直觀知へ非連續的に

實體と屬性について

飛躍してゆく和解されなければならない。こゝに於てはじめて神の本質の永遠なる認識が到達され、神は本質と存在の同一として其の絶對的無限性が確信される。それは神の本質の抽象的形式的把握ではなくむしろ神の永遠性の具體的把握に外ならない。「神の或る屬性の形式的本質の妥當なる觀念から物の本質の妥當なる認識へ進む」(Ehrl. Prop. XL. Schol. II)と云ふ直觀知の定義はそれを示してゐる。蓋しスピノーザの汎神的世界觀に於ては神の具體的把握は物の本質の妥當なる認識と同一である筈だからである。

かくてエチカの結論否スピノーザ哲學の究極の到達點と考へられる神の知的愛はその根本に於て神の直觀知と異なるものではあるまい。直觀知は理性 *ratio* を否定的媒介となす如く、知的愛は感情 *affectum* を否定的媒介としなければならぬ。これ等の否定的媒介は共に人間の無限なる自己否定と考へられよう。かゝる無限の自己否定を通じてのみ超越が可能となり神の絶對的實在が確信されると共に、神の中に於て自己の根源が確信されるであらう。それを示すのがスピノーザの神の知的愛の思想に外ならないではなからうか。「神は彼が自己自身を愛する限りに於て人間を愛し、従つて又人間に對する神の愛と神に對する精神の知的愛とは同一であることが起る」(Eth. V Prop. XXXVI

(Cor.)

哲學的思念に於けるかゝる神への道は如何にして可能であるか。それは最早スピノーザの道ではない。我々に残されるのは認識より實在、理性より自然、人間より神への超越の道であると考へるより外はない。こゝに於て、スピノーザ哲學は其の體系の自己矛盾を通じてかゝる永遠なる哲學的眞理を開示するものと言ひ得るのではなからうか。